

言語文化専攻

言語文化比較交流論講座 准教授

田中 智行

昨年の春に着任してから、冬まで研究室棟が改修中でした。やっと自分の部屋ができたタイミングでこの自己紹介を書いています。先日、研究室の設営をしたのですが、整理分類の苦手な人間なので、設営といっても、適当に箱詰めした本を適当に本棚へ放り込むだけのこと。傍から見れば「汚い部屋のできあがり」なのですが、本人はそこが落ち着くので処置なしです。

1977年生まれ。小学校二年生までは盛岡に住んでいました。記憶にのこる情景といえば、庭に降りしきる雪を窓から飽きもせず眺めたり、積もった雪に寝転んで星空を見上げたり。総じてボンヤリしながらあれこれ考えるのが好きなのは、当時から変わらないようです。

中国に関心をもったきっかけは『西遊記』でした。横浜に移って数年後の、小学五年の頃だったでしょうか。親が岩波少年文庫の『西遊記』を買ってくれ、夢中になって読んでから、デパートの本屋で「いちばん詳しいやつ」をねだり、平凡社の全訳本を手に入れました。上巻は店頭になく、取り寄せてもらっているあいだに下巻から読みました。『西遊記』のばあい、どこから読もうと構わないようなものですが、似た話の繰り返しともいわれる後半を新鮮な目で読めたのは、作品との出会い方としてちょっと珍しいかもしれません。『西遊記』は全部で百の回から成りますが、この下巻は第五十一回からではなく第五十回から始まっていた。つまり上巻は、話の切れ目にあわせて第四十九回という中途半端なところで終わっているのですが、この四十九という数字に着目することで後に初めての論文を書くことになったのですから、人生わからないものです。

乱雑な本棚の中が落ち着く、雪やら星やらぼんやり見るのが好き、というのと根は同じなのかもしれませんが、いみじくも『西遊記』を真ん中から読み始めたように、文学研究者としての私は、ひとつの作品の「なか」で延々遊んでいるのが好きなタイプのようです。いま勉強しているのも、文学史でいえば『西遊記』のお隣さんくらいにいる大長編小説なのですが、長い付き合いになっても一向に飽きません。むしろ次から次に考えることが出てくるので、つくづく古典は面白いと思う日々です。

面白がっているだけでもいけないのですが、論文で取り扱えるのは、ひろい世界を箱庭的に切り取った一部分にすぎません。もちろん箱庭の整備だって大変だし技量が要るわけですが、いっぽうで遊ぶこと、楽しむこと、そういった余裕のある精神を奥底に持っていたいものです。これは研究以外の局面でもきっと同じなので、教育の場にあっても、たとえば中国語の入門クラスであっても（ある意味、入門クラスであればこそ）、奥に広がるゆたかな世界を垣間見せる授業を展開したいし、そのためには教師自身が好奇心を持ちつづけなければならぬでしょう。

縁あってやってきた大阪の地。少しでも多くの学生に「遊び」の楽しさを伝えられればと

思っています。

言語文化専攻

現代超域文化論講座 講師

北井聡子

既にご存知の方もいらっしゃると思いますが、待兼山は私が幼少期を過ごした大変馴染み深い場所です。父が文学部の助手をした関係で、私達一家は、豊中キャンパスの東側に建つ国際交流会館に4年間住んでいました。今からもう30年ほど前のことです。昨年の着任後すぐ、当時と変わらない文学部の佇まいを見て、懐かしさのあまり、こっそり中に侵入したのですが、あの頃と同じ本の匂いがして、薄暗い廊下を歩く父の姿が思い出されました。考えてみると、当時の父は今の私よりも年下だった訳で、なんとも感慨深いものがあります。またあの頃、キャンパスの池は今の数倍の大きさで、そこへ数羽の白鳥が毎年秋になると北方からやってきたものでした。美しく大きな鳥達が湖面を進む姿を母とぼんやり眺めていたのは、古い幸福な記憶の一つです。その後、父の就職に伴い、待兼山を離れ、西宮や奈良の学園前に移り住んだ後、私自身は津田塾大学への進学を期に東京に移住、昨年の3月まであちらで過ごしていました。

ロシア語に関心を持ったきっかけは、3歳から続けていたクラシック・バレエです。才能は全く無かったようですが、青春時代は毎日レッスンに明け暮れていました。プリセツカヤの「瀕死の白鳥」、マクシモワとワシリーエフの黄金カップルなど旧ソ連が誇る至高のバレエ芸術に魅せられたことから、やがてロシアそのものへの憧れへと繋がって…というのが公式の私の「物語」なのですが、本当のことを言うと、基本的に判官鼻頂でマイナーなものに惹かれる性格ゆえに、第二言語を選ぶ際に人気のないものを選んだだけのような気がします（そういえば、私が習っていたバレエはイギリスのメソッドでしたっけ）。こんな不純な動機でロシアとの関係が始まったわけですが、随分と長い付き合いになり、二度のモスクワ留学では散々悲惨な目にあったものの（!）、阪大に導いてくれたありがたい存在です。

「ロシアは頭ではわからない」—これは19世紀の詩人チュッチェフが残した有名な言葉です。西欧ロゴスの世界とは違い、本来交わることのないカテゴリー間の超越性を許すダイナミックなロシアの思考には、振り回されることが多いのですが、しかしそれは、ドストエフスキー的なアポカタスタシスの世界観にもつながるものです。人間の混沌とした部分があるがままに受け止め、あらゆるもの排除せずに存在させようとする志向は、ユートピア的ではあるものの私のジェンダー研究を道標にもなっている気がします。

一年半前までは、自分がまたこの大好きな土地に帰ってくるとは夢にも思ってもいませんでした。このような恵まれた環境で研究を続けられることは、本当に僥倖としか言いようがありません。これまで支えてくださった周囲への感謝を忘れず、今後、言語文化研究科の発展に少しでも貢献できるよう精進してまいりたいと思います。

言語文化専攻

言語文化教育論講座 講師

Lee Shzh-chen Nancy



私は台湾生まれオーストラリア育ちの華僑です。オーストラリアで初等中等教育を受けた後、教職を希望し、大学に教育学部に入学しました。また、大学時代に日本語授業を履修したため、日本に一年間交換留学をしました。平和に根ざした日本の文化に魅了され、日本に進学することを決めました。

台湾、オーストラリアと日本三カ国で教育を受けたため、中国語、英語と日本語能力を身に付けることができました。また、異なった在住経験から異文化・国際交流の機会に恵まれ、言語の重要性を実感しました。自らの経験から語学教育に興味を持ち始め、京都大学大学院人間環境学研究科・外国語教育講座に進学しました。修士課程では外国語教育を勉強し、外国語の指導法、学習環境のあり方、学習者を理解する仕組み、学習動機づけなど実践的な面を考察しました。

修士課程を終了後、新卒としてトヨタグループに入社しました。入社後主に社内教育の仕事を担当し、また、海外会社とのやり取り、翻訳・通訳の業務に関わりました。一年間の会社生活を得た後、大学に転職しました。愛知大学、東京大学、京都大学、そして大阪大学（2014年～2016年）で嘱託講師として勤めました。

嘱託講師として働きながらテンプル大学（日本校）の博士課程に進学し、応用言語学を専攻しました。科学的に言語の発達を研究し、研究結果を教育現場への取り込みを考察しました。実践と理論をそなえ、さらに第二言語としての英語発話能力の発達研究に取り組んできました。博論では日本人大学生の英語発話能力の向上を縦断的に調査しました。特に流暢さ、正確さと複雑さの観点から学習者の英語の発話の変化を分析・考察しました。

私生活ではスポーツを楽しんでいる毎日を送っています。ランニングや水泳以外にテニスやゴルフも楽しめる程度でやっています。年々体力の低下を自覚していますが、今年中にトライアスロン大会のデビューを考えています。

研究、教育、またスポーツの面でも、まだまだ未熟なものです。これからどうぞよろしくお願いたします。

マルチリンガル教育センター

フランス語 特任准教授

Sébastien Delbes

フランスのリモージュ出身で、大阪には2005年にやって来ました。きっかけは「外国語としてのフランス語教育」と「パソコンを用いた言語習得」についての研究の後、フランス

外務省が募集していた大阪アリアンス・フランセーズでの2年間の教育任務に応募し、採用されたことでした。そこで2年間にわたり公私ともにとっても実り多い年を過ごしました。この期間中、語学教師と DELF/DALF（フランス語学力資格試験/フランス語上級学力資格試験）の試験官としての活動のほか、ICT 分野での教育経験を活かして、アリアンス・フランセーズのウェブサイトのリニューアルとともに、その電子掲示板を用いた会話のための広場（フォーラム）を考案し、推進しました（2013 年度まで）。

その後、アリアンスで教師として働きながら、アンスティチュ・フランセの講師も務め、同時に甲南女子大、神戸外国語大、神戸日仏協会そして阪大（2015 年から）など、いくつかの教育機関で教えてきました。2011 年には DELF/DALF センター（日本フランス語試験管理センター）のウェブサイトを作成しましたが、この経験により、ウェブのデザインや人間工学の分野での知識も深められました。

2019 年 10 月に、大変光栄なことに大阪大学大学院言語文化研究科の一員として迎えていただきました。私にとっては初めての専任職です。まだ学ぶことばかりですが、大学の名声にふさわしいレベルまで自らを高められるよう頑張る所存です。

私の研究分野は、言語のブレンド型学習にまつわる諸問題です。すなわち対面あるいは遠隔でのタスクの構成や、ネット上の交流の分析、教授計画の構想、ネットを通じた指導や、学習者の提出物の添削などが挙げられます。

2020 年 4 月からは、異なったレベルの様々なクラスでブレンド型学習を実践する予定です。その内の 1 つは 2 年生を対象としています。主な目的は彼らの日常生活の様々な状況をシュミレーションすることですが、それを対面あるいは遠隔でのタスクを組み合わせることで、まるでフランスに住んでいるかのように体験してもらう予定です。

趣味は写真で、特にストリート・スナップを白黒写真で撮っています。私がとりわけ好むのはフランス写真界の古典時代で、アメリカのストリート・スナップの先駆となる写真家たち（アンリ・カルティエ＝ブレッソン、ロベール・ドワノーなど）が好きです。他に、日本の偉大な写真家たち（森山大道、植田正治、木村伊兵衛）も好きです。いつか大阪の街の写真集を出版したいと思っています。

多言語教育開発チーム 特任講師（常勤）

安部 麻矢

2019 年 7 月よりマルチリンガル教育センターの多言語教育開発チームにてお世話になっております。私の専門は言語学で、タンザニア北東部の山の奥で話されているマア語の記述を通して、社会言語学的分析と、バントゥ諸語のマイクロバリエーションの視点からの分析を行っています。

アフリカの言語を研究することになったのは、箕面のスワヒリ語専攻の学生であったことがきっかけです。最初の数年は全く熱心な学生ではありませんでしたが、スワヒリ語のオノ

マトペに興味を持ったことから、ことばについてももう少し掘り下げて勉強したくなり、大阪外大の大学院博士前期課程を経て京都大学大学院文学研究科言語学専修の修士課程に入り直しました。その頃読んだ言語接触についての本に、とても面白い言語接触のケースとしてマア語のことが載っていました。それによると、マア語は文法がひとつの言語（バントゥ系言語）から、語彙が別の言語（非バントゥ系の複数の言語）から供給されてできた言語だといえます。さらに別の言語接触を読むと、マア語については詳しい言語データがないとあったので、それなら自分で調査してデータを取ってこようと思い、M1の終わりにタンザニアにフィールドワークに行きました。これが私にとって初めてのスワヒリ語圏での滞在であり、スワヒリ語のみを使って長期間過ごすのもこれが初めてでしたので、向こうの人々の考え方やことばの後ろにある真意などを理解するのに苦労することが多々ありました。しかしその後も毎年数か月フィールドワークを行い、タンザニアの人々の考え方や文化や社会のありかたに少しずつ慣れていきました。調査地選びや話者探しも、紆余曲折がありましたが、2003年に知人を通して知り合った村のママの一家にずっとお世話になっています。

2006年に京都大学文学研究科博士後期課程を研究指導認定退学後は、大阪大学外国語学部のスワヒリ語をはじめとして、他の複数の大学でスワヒリ語や言語学の非常勤講師を務めながら、3人の子の出産・育児をしつつ、タンザニアでのフィールドワークをもとにした研究を続けてきました。2014年4月から2017年3月までは学振RPDとして京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に所属しておりました。その後2017年4月から2019年6月までは、学振PDとして、大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻にお世話になっておりました。

そして2019年7月からは、今春開設予定の、OUマルチリンガルプラザという、学生の自律的な言語学習を支援する施設の開設・運営に携わっております。マア語の研究は直接職務に関係なさそうですが、箕面と京都で複数の言語と文化を学んだことやタンザニアでのフィールドワークや海外での成果発表の経験が活かせるらと思っております。なにとぞご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

マルチリンガル教育センター

マルチリンガル教育開発オフィス 助教

三木 訓子

2019年4月よりマルチリンガル教育センターに赴任し、e-learningとプロジェクト発信型英語に携わっています。滋賀県東部の蒲生野と呼ばれるのどかな田舎で生まれ育ち、遊んでばかりで勉強をしなかった私が大阪大学にご縁をいただくまでを記すことで自己紹介したいと思います。

私がどれだけお馬鹿さんだったかを証明するものの一つに、高校生の時の「I am go to school.」というとんでもない英文があります。その文を私が言うのを聞いた友達が「be 動

詞とナントカ動詞は普通は一緒に使ったらあかん。」と教えてくれました。当時の私にはナントカ動詞も聞き取れず、教えてくれたことが何のことだかもわからなかったのですが、ものすごく初歩的なことを教えてくれたのだということだけは直感的に悟ったのであります。しかしながらこの時は無知な自分を恥じるあまり、「なんて言ったの？ それ、どういうこと？」と聞き返せませんでした。が、その時の状況は今もありありと思いだせるほど鮮明に記憶に残っています。だからといって心を入れ替えてまじめに勉強するようになったのかというとそうでもなく、高校卒業後は進学など考えもせずに就職しました。

結婚して子どもが生まれ、13年間勤務した会社を退職してからは、家庭にも普及しだしたパソコンを使って自宅で印刷会社の下請けをしていました。ひよんなことから職業訓練短期大学で情報処理の非常勤講師をしないかという話が舞い込み、office のアプリケーションや HTML を教えました。これが後になって英語教育で e-learning に関わることにつながりました。

子どもが中学生になり、公民館で開講されていた英会話教室に通いだしたのもこの頃でした。まったく文法の知識がなかった私は、NHK ラジオで放送されていた中学生向けの「基礎英語」を聞き始め、この時、高校の時の友人が言った「be 動詞とナントカ動詞 (=一般動詞) は普通は一緒に使ったらあかん」ことを理解し、初めて英語をもっと学びたい、そしてわかりやすく教えられるようになりたいと思うようになりました。それで教員免許が取得できる大学へ行くことにしました。

教員免許を取るための介護実習で老人ホームへ行った時、職員やボランティアの方々が用意したアクティビティに喜んで参加しているように見えない利用者が、小・中・高校で学びに興味を持ってないまま授業に出ていた自分に重なり、これが契機となって、主体的学習と成人教育について研究したいと大学院に進学しました。修了後は情報処理や英語の非常勤講師をしたり、語学学校で e-learning サイトの運営をしたのち、常勤として立命館大学でプロジェクト発信型の英語を 5 年間担当しました。以上が私をここに導いてくれることになったあれやこれやの経験です。これからはマルチリンガル教育センターに微力ながら貢献できればと思っています。どうぞよろしく願いいたします。